



- 立科小学校／午前9時～午前11時30分
電話 0267-56-3131 (呼)
 - 立科中学校／午後2時～午後5時
電話 0267-56-1076 (呼)
 - 立科町児童館／
午前 11時50分～午後1時40分
電話 0267-56-0303 (直通)
- (担当 指導主事 中島一彦)

指導主事だより

教育委員会

なんだかうれしい

俺はさあ ピンク着るとテンションあがるんだよ

他の地区で中学生の授業を参観した時のエピソードです。

教師が変わろうとするとき

「規則やルールは守るべき」というオーラを身体全体からかもし出し、次々に生徒に迫るI先生。「中学生らしく」「規則は守るべきもの」「自制心を求める」等々。その断定的な言葉に不満げな表情をあらわにしていく生徒たち。

そんな中でI先生は「なぜルールは守るのか」の問いを黒板にはりだしていきます。生徒たちからは○「意味が分からないけれど、従っていた」○「面倒くさいけど、怒られなければ いいから」そんな発言が続きます。

○「先生、先生っていつもピンクのシャツ着て来るじゃないですか。何で ですか？」と、ふいにあがるI先生に向けての質問。・・・強面の表情が和らぎ、不安な面持ちも浮かべつつ・・・

「先生には・・・校則は当てはまらないんだよ・・・」と応じたI先生。

○「えっ？でも校長先生は白を着ていますよね」

と、畳みかけるような生徒たち。そして先生をじっと見つめる生徒たち。

やがて伏しがちな顔を静かに上げ、戸惑いつつも語り出すI先生。

「あのさあ・・・俺はさあ・・・ピンクを着るとテンションが上がるんだよ」・・・と。

I先生が、そう言い終えた瞬間に歓声が沸き起こります。

自分自身の戸惑いを生徒にさらしながら生徒と向き合っていくI先生。人間としての弱さ、柔らかさや温かさを届けようとしたI先生の変化。それは同時に「規則という価値」をめぐるながら、自分自身の生き方を探し始めたI先生のようにも思えたのです。「共に生きる過程が教育する」とは教育学者デューイの言葉です。生徒とI先生が相互により良い生き方を探しながら、それぞれの生き方を織りなし始めた瞬間の様に思えました。「共に育ち合う豊かさ」・・・という言葉が授業を参観しながら浮かび上がってきました。

授業の終盤、Gさんが挙手し、次のような発言をしていきます。

○学校の校則は納得のいかない部分もあったし、だけど、考えてみると今の自分には規則はあった方がいいのかな。

こんな内容でした。

「先生がピンクを着ているから、私たちがピンクを着ることが出来る」・・・そういう思考には向かわない生徒たち。お互い途上にあるものとして学び合うという信頼が生まれているからです。先生が変わろうとする姿にふれながら、生徒たちは「規則」と「今の自分」とのつながりを探究し始めていきます。「だけど、考えてみると、今の自分に規則はあった方がいいのかな」と語るGさん。

さざ波のように沸き起こる自身の心の内への気づき。見えないけれど大切なモノ、その大切なモノが見えるようになってきた自分の心へのときめき。そんな語りの様にも思えてくるのです。

自分の人生を自分が進めること、他人の評価ではなく、自らの評価を厳しく見つめ出したGさん。教わる生き方ではなく、自ら創り出していく生き方をつかみ始めた見事さを思います。



あと十日 受験の子らよ がんばれと
母校の校舎の天突き 伸びる